

## 医療の不確実性と、医療不信

今回は、新聞記者であり、乳がんになってしまった女性の  
方が、新聞に書かれていた文章を紹介したいと思います。

「医療は万能ではなく、不確実なものだ」——。間もなく  
4年になる乳がんの闘病生活を通じて、この言葉の意味が  
わかるようになった。

先月のCT検査で、わきの下のリンパ節の腫れが見つかった。  
乳がんが最初に転移する場所だ。ただ、私の場合、乳房再  
建で異物を体内に入れているので、炎症の可能性もある。

「がんの転移か、炎症か」。診察室で医師と一緒に画像を  
凝視しながら息をのんだ。半年前のCT画像にも小さな影  
が写っていたが、今回は明らかに数が増え、大きくなっている。  
だががんかどうかはわからない。超音波検査や腫瘍マ  
ーカーは異常なしだが、がんでないことの証明にはならない。  
白黒をはっきりさせるには手術で細胞を摘出して調べる必  
要があるが、それは体への負担が大きい。結局、「今は何と  
も言えない。もう少し様子を見よう」ということになった。

医療は万能ではない、ということは、前から知っているつ  
もりだった。それでも、現代の医療技術なら、がんかどうか  
の判別くらいすぐできて、速やかに治療  
に入れるものだと思っていた。「医療の限  
界」を実感したのは患者になってからだ。

きっかけは、最初の手術から半年で見  
つかった局所再発だった。「取り残しとか、  
医療ミスじゃないの」と友人に言われ、  
不安になって、主治医以外の医師の診察

を受けたうえ、取材先の医師  
にも意見を聞いて回った。彼  
らは、乳房全摘でもすべての  
がん細胞を取り切れない場  
合もあること、がん細胞が増  
殖して大きくなると検  
査でも発見できないこと、標準治療がすべての人に効くか  
どうかは分からないこと——など、人間の身体の複雑さや  
医療の難しさを、とことん説明してくれた。

延べ10時間は超える対話を通して、「現代医療も不完全  
で分からないことだらけ」ということを認識できた。同時に、  
自分の乳がん治療にも100%はないということをつらい  
けれど受け入れざるを得なかった。

患者は「医療は万能だ」と思いがちだ。それが、うまくい  
かなかった場合に医療不信につながる。知人の〇〇・〇〇  
病院医師は、「医療の不確実性と限界を理解してもらうこと  
が、医師と患者の不毛な対立を防ぐのに役立つ」と言う。

その通りだとは思うが、患者には、「不確実性」について  
の説明を受ける機会が少ない。そこに「不信」の根がある。



以上です。医者には「当たり前」の話でも、  
患者さんには違うのだと思います。この「溝」  
をなんとか埋めなくてはいけないと思います。

院長 加藤 奨一